

答え合わせ・解説

問1	答え 1 明	足利義満は、14世紀後半に中国大陸を統一した明の皇帝から「日本国王」として認められ、1401年に国交を樹立しました。これが「遣明船」による貿易の始まりです。前代の元や、平安時代末期に平清盛が貿易を行った宋と混同しないよう注意が必要です。
問2	答え 1 貨幣経済が浸透し、各地で市場が開かれるなど商業活動が活発になった	14世紀、中国（宋や元など）から大量の銭貨が輸入されたことで、日本国内ではそれまでの物々交換に代わって貨幣を用いた取引が一般的になりました。これにより、十三湊のような遠隔地の港町においても経済活動が加速し、定期的な市場の開催や輸送業の発達など、中世社会における商業の大きな転換点となりました。他の選択肢にある朱印船貿易や問屋制家内工業、藩札などは、より後世の江戸時代を中心とした事象です。
問3	答え 1 平安時代	紫式部は平安時代中期に活躍した作家であり、かな文字の発達を背景に『源氏物語』を執筆した。また、遣唐使の廃止によって、日本の気候や風土に合わせた国風文化が貴族の間で栄えた。
問4	答え 1 鑑真 → 最澄 → 菅原道真 → 足利尊氏	鑑真は奈良時代に唐から来日し、大宰府の戒壇院で戒律を伝えました。最澄は平安時代初期、遣唐使として渡海する直前に大宰府で修行を行っています。菅原道真は平安時代中期に藤原氏との政争に敗れて大宰府へ左遷されました。足利尊氏は鎌倉幕府滅亡後の南北朝時代に、一度京を追われた後、九州で勢力を立て直すために大宰府近郊に滞在しました。
問5	答え 1 幕府の直轄領からの収入が不十分であったため、都市部の豊かな業者に特権を与える代わりに安定した税収を得ようとした。	室町幕府は直轄領（御料所）が少なかったため、財政を支えるために京都などの都市部で経済力を持っていた土倉（金融業者）や酒屋に注目しました。幕府は彼らに独占的な営業権などの特権を認める見返りとして、倉役や酒屋役と呼ばれる税を課し、重要な財源としました。このように、幕府が特定の商工業者と結びついて財政を維持していた点が室町時代の大きな特徴です。
問6	答え 1 足利義満	室町幕府の基盤を固めた第3代将軍の足利義満は、1392年に南北朝の合一を実現し、政治的な混乱を収めました。外交面では明との国交を樹立し、倭寇と区別するための勘合符を用いた日明貿易（勘合貿易）を始め、幕府の財政を潤しました。足利尊氏は幕府の創設者、足利義政は銀閣を建て応仁の乱の時期の将軍、足利義昭は織田信長によって追放された最後の将軍です。
問7	答え 1 管領	室町幕府では、将軍の補佐役として「管領」が置かれました。これは鎌倉幕府において北条氏が独占した「執権」とは異なり、細川氏・斯波氏・畠山氏という3つの有力な守護の家系（三管領）が交代で務める仕組みとなっていました。守護の強大な力を幕政に取り入れることで、幕府の権力基盤を安定させる狙いがありました。
問8	答え 1 将軍のあとつぎ問題や守護大名の対立が背景となり、実力のある者が上の身分の者に打ち勝つ下剋上の風潮が広がった。	室町時代の中期、8代将軍足利義政の後継者をめぐる争いに、細川勝元と山名宗全という二大守護大名の勢力争いが結びついたことで応仁の乱が勃発しました。この戦乱により幕府の権威は失墜し、中央の統制が及ばなくなったことで、身分が下の者が実力で上の者を倒して領地を広げる「下剋上」の風潮が全国的に広まりました。これが、のちの戦国時代へとつながる大きな転換点となりました。
問9	答え 2 日明貿易	室町幕府の第3代将軍である足利義満は、明の皇帝から「日本国王」という称号を与えられて臣下となる形式（冊封）をとることで、正式な国交を樹立しました。この関係に基づいて行われた対外貿易が日明貿易です。幕府はこの貿易を独占することで、莫大な利益を得て権力を強化しました。